

# ポスト青年期の親子関係意識： 「良好さ」と「自立」の関係

米村千代

## はじめに

ポスト青年期の若者に学問的、社会的関心が集まっている。家族社会学の領域では、特に80年代後半以降より移行期の長期化が議論になり、親元で居心地のよい生活を送る若者を捉えたパラサイト・シングル論が注目を集めたことは記憶に新しい。今日、家族研究のみならず、フリーター・ニート論、シティズンシップ論からのアプローチ、若者支援という政策的関心など、異なる関心や角度から、この時期の若者が研究対象となっている。

本稿は、指摘されてきたこの時期の親子関係の「良好さ」と自立意識との関連について考察を加えるものである。成人後も親からの物心両面の支援を受け続けることは、子どもにとって果たして居心地のよいものであるのだろうか。親子の間に「自立」をめぐる葛藤や緊張は存在しないのか。双方はこのことをどのように考え、受け止めているのだろうか。

ここでは、ポスト青年期研究会が2001年から2003年に実施した調査データをもとに、先述した問題に焦点をあてる<sup>(1)</sup>。特に本稿では自由回答欄への記述と50代に行ったインタビューを取り上げる。

## 1. データの概要

ここで用いるデータは、ポスト青年期研究会が上記の期間に府中市、松本市在住の20代、50代に対して実施した調査に基づいている。主な分析の対象となるのは、調査票の最後に設けた自由回答欄への記入である。具体的な設問は、「最後に、最近の親との関係や、学校の卒業の前／後あるいは就職前／後の親子関係の変化などについて、ご自由にお書きください」(20代)、

「最後に、親子関係およびあなたご自身のことについて、ご自由にお書きください（子どもの就職・結婚・独立、親子のコミュニケーション・援助など）」(50代)である。加えて、50代の調査回答者のなかから、12名に行ったヒアリング調査から得たデータも用いる<sup>(2)</sup>。

アンケート調査では、親子関係の良好さについて、「親との関係は良好ですか」(20代)、「そのお子さんとの関係は良好ですか」(50代)と尋ねている。20代への質問では、父親、母親それぞれについて聞いている。また50代への設問にある「そのお子さん」というのは、結婚前の子どもが複数いる場合、子どものなかで、一番年上の子どもを指している。回答は、「良好である」、「どちらかというと良好である」を合計すると、両世代とも約9割にのぼり、大多数が親子関係を良好であると回答していることになる。なお、アンケート項目では、同別居をはじめ、同伴行動の頻度や親子の経済状態を尋ねているので、先に述べた問題設定について量的データに基づいた分析をすることも可能であるが、本稿は、質的データを中心に分析し、量的な分析については今後の課題としたい。

## 2. 先行研究と問題設定

### 1) 親子の親密さと子どもの自立

Williamson (1991) は、成人 (adult) がどのようにして心理的に「両親の家」を去るのか、自立しながら情緒的に定位家族に属し続けることは可能かという問いを、文字通り *Intimacy Paradox* というタイトルのもと提起している。両親にとって、子どもが情緒的に自分たちから離れてしまうことは脅威であり、他方、子どもにとっては、両親との関係においてどのように自身の役割と自立を確保するかが問題であるとする。情緒的關係と自立とは緊張関係を孕むという指摘である<sup>(3)</sup>。JonesとWallace (1992=1996) も、自立と依存の区別は今日曖昧で、「自分の子どもを依存させたままにしておきたいという親の願望と自立した青年に成長するのを認めてやりたいという願望との間に、一種の緊張がある」(Jones and Wallace 1992=1996, 147) と指摘する。

他方で、親子関係は、考えられてきたより良好であるという経験的研究もある (Coleman and Hendry 1999=2003) (Heath and Cleaver 2003)。コールマンらは、青年の自立にとって親からの感情的離脱や別居が重要とする立場に対して、青年が家族とのつながりを維持しながら個性の成長をはかることは可能であるとする (Coleman and Hendry 1999=2003)。

Heathらによれば、これまでイギリスの若者研究においては、経済的社会的に問題を抱えている層が主な研究対象で、構造拘束モデルが一般的であったが、このモデルは、他の階層も含めた若者の考察に対しては限界を持つという (Heath and Cleaver 2003)。若者の居住関係には階層差があり、同居していてもプライバシーと自由が守られる一定以上の層にあっては、同居はより選択的になってきているとする。

ここで紹介した研究は、10代を対象としているものが多く、20代以降の日本の若者の家族関係にそのまま適用することができるかどうかは判断を要する。しかし、Mizen (2004) が指摘するように、移行を特徴づけてきたイベントの経験年齢の幅が伸張し、多様化してきていることを考えれば、ここで分析対象となっている20代以降の若者にも適用可能な視点を多く提供してくれている。

親密性 (intimacy) 概念をここでの家族関係にストレートに適用可能かどうかについても、本来は議論が必要であろう。われわれの調査で尋ねているのは親子関係の「良好さ」であり、「親密さ」という表現は用いていない。良好であることと親密であることは、語感からいっても異なるし、想定されているコミュニケーションや関係の密度も同じではないだろう。しかしながら、さしあたって重要なのは親密さと良好さの厳密な異同ではなく、家族関係が親子にとって肯定的であるのか、緊張を孕むものであるのかという点である。その意味において、親密さと自立の関係に関するこれらの研究の指摘は、本稿にとって重要である。

しかし回答に現れる「良好さ」を、良好さそのものと受け取ってよいのか、背景に緊張関係を孕むものかを見極めるのは難しい。検討できるのは、アンケート調査、インタビュー調査への回答という形で、「語られた」姿である。長い時間を共有するなかで、一度も緊張や葛藤がなかった家族というのは希

有であろう。そこで、本稿の目的を、親子関係が「本当に」良好かどうかを見極めることにはではなく、あくまで調査に現れる親子関係についての語りがどのような形式で表出されているかを抽出することと設定したい。以下に述べていくように、「良好さ」の語りには、いくつかのパターンが見いだされるし、背景に葛藤や緊張を回避し、顕在化させない配慮を見ることもできる。

## 2) 移行期の問い直し：離家の捉え方

移行期研究では、これまで離家の遅れを自立の遅れと見る視点が代表的であった。若者は成人したら離家するべきだ、それが自立だという規範的前提が若者研究には暗黙に存在したといってもよいかもしれない。しかし、離家と大人への移行の関係が複雑化、多様化している現在、その枠組みの有効性が問われている。研究の規範的前提自体を問い直すべき段階にある。

親元同居が裕福さの現れなのか、若者の社会的経済的脆弱性の現れのかも問われてきた点である。現在は、若者がおかれている社会状況もあって、親元で自由を享受する裕福な若者像と社会的弱者としての若者像が併存している。イギリスの研究でふれられているように、どの社会層に属するかによって同居の意味は異なる。親子双方に経済的余裕があれば、同別居はより選択的になり、「ライフスタイル」として見ることもできよう。他方、双方あるいは一方に経済的余裕がないがために、同居せざるを得ない状況もある。また両方の場合において、移行は単線的、一方向的ではなく、同別居を繰り返したり、近居して行き来し合うという傾向も見られる。成人子の同居率が上昇していることは欧米社会にも共通の傾向である。

HeathらやKenyonの研究では、成人子の居住の実態だけでなく、そこにhome意識がどのように連結しているかを含めた研究が展開されている(Heath and Cleaver 2003)(Kenyon 1999)。そこでは、ホーム(home)という概念を用いながら、「家(ホーム)」とアイデンティティとの関連に注目し、「両親の家」から出ることが、どのような意味を持つかが問われている。心理的な居場所、拠点がどのように移行し、また併存しているかを問うことで、「移行」の問題に接近しようとする視点である。親からの自立を居住実態で捉えることが困難になってきた今日、重要な示唆を含んでいる。

本稿ではこれらの先行研究をふまえ、自立と離家といった切り離し、その関係を改めて当事者の意識から問い直すことが課題となる。親との同別居には両世代の経済力等の影響も無視できないが、ここでは、あくまで本人たちの意識に照準して「自立」を問うてみたい。

### 3) 分析の単位：個人か家族か

20代未婚成人子の親子関係の特徴とそれを捉える枠組みについては、ライフコースの視点から、この時期を大人への移行期として捉え、晩婚化等による移行期の長期化として位置づける視点が代表的である（宮本・岩上・山田 1997）（宮本 2004）。親からの自立の遅延、親への依存がこの時期の特徴としてあげられ、山田昌弘の「パラサイト・シングル」論も、この視点から若者の親子関係を捉えたものと位置づけられる（山田 1999）。これらの視点は、個人を単位として家族を捉えようとする立場にたっている。

他方で、自立／依存を直接的な問題とせず親子関係の現代の特徴として捉える見方もある。家族あるいは親子関係を一つの単位として見て、成人親子間の支援関係を新しいタイプとして捉える方法である（袖川他編 2005）。親子間の支援関係を個々の関係に分解するのではなく、家族の関係性に着目することからその現代の特徴を捉えようとするものである。この視点からは、例えば家族内の支援は、たとえそれが一方向的であっても中長期的展望も含めた家族戦略として捉えられる。未婚成人子の親元同居は、（特に親の側の）心理的効用を高め、住居費の節約や家事の共同につながるという意味では「合理的」である。電通消費者研究センターの調査研究（袖川他編 2005）では、結婚後の親子の近居を「平成拡大家族」とモデル化し、現代社会状況に適合的な家族モデルとして提起している。

現実にも目を向けて解釈するならば、親子、家族を一体として考える意識と、親が子を一人の独立した人間として自立を願う意識は混在しており、しばしば両義的である。自身の願望と家族全体（あるいは親にとっての子や子にとっての親）の願望は一致するとは限らない。本稿では、混在し、しばしば葛藤する状態を両世代の意識から読み取りたい。ただし、調査の設計上、データの20代と50代は直接の親子の対応関係にないため、親が思っている

ことをその子どもがどう受け止めているかの直接的な対比の分析は出来ないことは断っておく。

### 3. 20代からみる親子関係

まず、20代の親子関係の自由記述から親子関係の評価を考察する。先に述べたように本調査では、両世代とも約9割が親子関係を「良好」と評価している。先行研究で、青年期の親子関係に緊張をもたらす要因とされていたのは、親の統制、監視からの子の自立欲求と情緒性との関係である。「良好である」という答えの裏側に、そういった葛藤や緊張をみることができるだろうか。

まず、同居満足度のグラフから、両世代の意識を確認しておきたい。20代と50代で、同居している人にその評価を尋ねると、20代には「別居したいができない」への回答も少なくない(図1、2)。特に府中の20代男性では、同居に満足している人よりも多い。その理由の第一は「経済的に無理だから」である。同居している20代には、葛藤を抱える人も少なくはないこ

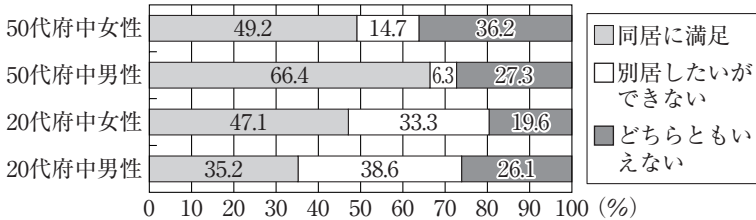


図1 同居満足度 府中

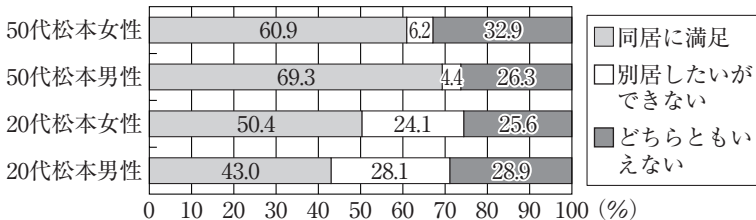


図2 同居満足度 松本

とがわかる。このことをふまえて20代の自由回答を見ていきたい。

### 1) 離家：空間的分離と良好さ

離家と若者の自立の関係は議論を呼んでいることを先述したが、離家については、典型的ともいってよい回答が見られた。離家によって親との関係が良くなった、あるいは親の有り難みがわかったという記述である。離家は親との関係を見つめ直す機会になっており、親子関係が好転したと述べる回答が多い。下に取り上げる離家は必ずしも経済的自立を伴っていないが、それでも空間的分離が親子関係に持つ意味は大きいといえる。

「1人暮らしをし始めてからの方が親との関係は良くなったと思う。」  
(松本28歳男性)

「1人暮らしを始めてから親の有り難さがわかりました。離れて暮らすことによって、親と信頼関係が結ぶことが出来るようになったと思います」(松本24歳男性)

「両親と離れて暮らしてから、親との関係が良くなったと思う。親というより人生の先輩という存在であり、私のことを一番に理解してくれる人たちだと思う。現在1人暮らしで就職活動しているが、親の近くで働きたいと強く願っています。」(松本21歳、女性)

「大学に入学することで親と離れて暮らすようになってから、親に対するありがたみがわかり仲良くなったといえる。高校まではうざったくてもしょうがなく、早く家を出たかった。自分が成人していくのに従って親の気持ちを理解していったのではないかと考えている。」(府中22歳男性)

「大学のため別居しているので、あまり実家には帰っていない。従って関係はかえて良好である。」(松本25歳男性)

「一人暮らしをする前は親との関係はあまり良くなかったが、一人暮らしをするようになって、誕生日にプレゼントを送ったりするようになり、そちらの方がいざという時にたよりにしやすく、利口な生き方だと思えるようになった。……後略」(松本22歳男性)

## 2) 就職による変化

離家と同様、就職(経済的自立)による関係性変化の記述もある。まずは、働くことを自立と捉える‘典型的’な記述である。

「大学時代は、親と別居しつつも精神的にも経済的にもかなり甘えていたと思います。働き出して少しずつ自立を感じる今日この頃。」(府中24歳女性)

就職や「社会に出る」ことによって親との関係が良好になったという記述も多い。

「社会に出てから親と話す機会が増えたと思う。」(松本24歳男性)

「就職してからのほうが、親と深く話し合えるようになった気がする(立場的にも、精神的にも、親も自分を認め、自分も親を理解できるようになった気がする)。」(松本25歳男性)

以下も、就職によって関係が良好になったという記述であるが、次の若者は、それに加えて、親を頼りにすることが素直にできるようになったと述べている。「対等」であるという意識が支援の抵抗をなくし親子関係を良好なものにしている。(もちろん、これは当事者が主観的に捉えている「対等」である。)下に紹介する府中の25歳の女性は、さらに「親の退職後についても、親が生活費をある程度保持していくことが大切かもしれない」と延べ、良好な(「バランスのとれた」)関係にとって、経済的な自立が必要という個人主義的な視点を他の若者よりも強く表現している。

「就職をし2年になるが、最近、親との関係はうまくいっていると思う。学生の頃は、経済的に親に依存しているという引け目と、その代償としての干渉を感じ、親子関係は今より不安定であった。現在収入を得ているため、自分も親に対して自信を感じ、金銭問題その他の問題で精神的に親を頼りにすることも素直にできるようになった。お互い自分の



収入をもつ現在が最もバランスのとれた関係だとすれば、親が退職後に生活費をある程度保持していくことが大切なのかもしれない。」（府中25歳女性）

「自分が社会に出てやっとお互いに様々な話をするようになった。いい意味で対等になった気がする。それはきっと社会に出て親の大変さ、苦労を自分が多少なりとも感じる事ができたからだと思う」（府中28歳男性）

「自分が成人し社会人になり、別居するようになってからの方が、親も自分もお互いつかず離れずで良い関係でいられるようになりました（比較的近くに住んでいるので。今は、お互い大人として、頼り、頼られ（主に精神的に）親から、時々良いアドバイスを受けてたりもします。親が50才を越えてからは体の方も序々に心配に思うようになりました。結婚後すぐはわかりませんが、いずれは両親と同居もしくは、すぐ近くに住めるようにしたいと思っています。（結婚する人の実家もすぐ近くなので）」（松本27歳女性）

次の若者は、社会人になり関係は良好になったとしながらも、同居していることによる自立の葛藤を述べている。「同居している＝精神的な自立ができていない」という感情を吐露し、同居に肯定的な親や、その親の愛への感謝によって、現状を自身で納得しようとしている。親の愛情と自身の自立との葛藤が顕著に表れているといえる。

「学生時代は自分のことに精一杯で、周りを見る余裕がなかったが、社会人になり両親と話す機会も増え、関係は良好に向かっていると思う（以前に比べ）。しかし、同居している＝精神的な自立ができていない」という感情が日ごとに増してゆき、最近は何となく得体の知れないもどかしさに駆られることがある。いつかは結婚して出ていくのだから、何も今すぐに出ていく必要はないという親の意見をのみこむことで親孝行をしているんだと自分に言い聞かせることがある。なんだかんだ言っても、自分の好きなようにさせてくれている両親には、とても感謝している。

心からの愛情を注いでくれていることを最近深く感じるようになった。」  
(府中26歳女性)

親を慮る記述も見られる。両親の感情を尊重することも、「自立」の一つの指標と考えられており、先行研究にもふれられていたように親の有り難さ、重さとそこからの離脱、自立の困難さが随所に見えてくる。

「就職して別居してから、少し親がさびしがっている。」(松本26歳男性)  
「まだ資金面で親に頼ってしまっている。早く、楽をさせてあげたい。自分が困った時だけ親を必要としているような気がしている。それ以外の時はうるさいと思っているかも。よくないことだと思う。」(松本27歳男性)

「長野県の大学に進学してから、めっきり会話や共に行動することがなくなったが、それは自分が別居したからであり、帰省中は良く話し、買物などにも出かける。就職先が長野県内になったため、両親は多少さみしそうであったが、将来的には地元に戻るつもりである。」(松本22歳男性)

「私が一人暮らしをはじめたことで母親は少しさびしいようだ。」(松本22歳男性)

ここまでの記述から見いだされたのは、別居、就職を「自立」と考え、そのことによって親との関係が良好になったという意識である。「典型的」という表現を用いたが、社会一般に存在する自立規範に準拠した意識とすることができると言える。部分的ではあっても「自立」したという自意識を持つことは、親との関係性を良好にすることとつながっている。

### 3) 親子関係の重さ、葛藤

就職や離家、進学といったイベントは、親子関係を好転させる契機となっていることに触れたが、これらの記述には、それ以前はうまくいっていなかったという記述を伴うことが多い。欧米の先行研究の多くが10代の若者

の親子関係を対象としていると先述したが、本調査の対象が20代、ポスト青年期にあるということもその「良好さ」の一つの要因であると推測される。少なくとも20代が、10代、あるいは高校時代の親との葛藤を経て現在の良好さがあると考えている。また別居にせよ就職にせよ親との密着的な関係から離れる機会を得ることは、親子関係をよりよくすることに貢献している。

反対に親子の関係が密でありすぎると子どもにとって重荷となる。親との距離の近さを「うっとおしい」とする記述からはその意識を見ることができる。親との一定の距離をとることは、個人の自立意識を育てると同時に、親の子離れも即す契機になっているのである。子どもにとって離家は、（経済的支援を受け続けていることもあって）一般的な意味での「自立」とあわせて「親からの」自立という意味が強いといえる。

以下の記述からは、子どもにとって、「自立」に関する一つの大きな問題は、親との距離であることが端的に伺える。親たちは、決して子どもに高圧的な態度をとっているわけではない。子を思い、心配する親であるからこそ、子どもは離れて行き難かったり、反発できなかつたりしている。

「大学に入学し、親元を離れてから、ほぼ毎日母親か父親から電話がかかってくる。時にはうっとおしいと思うこともあるが、心配してくれていることを思うと、やめてとも言えない。」（府中22歳女性）

「親と子が精神的に完全に独立することは永遠にないのではなからうか。」（松本22歳女性）

「別居して経済的に自立するようになってから、距離のあるいい関係ができるようになったと思う。やはり親にしてみれば子どもはペットのようなもので、それを脱するには金銭的援助から抜けることが必要不可欠と思う。友人だって全員とうまく気のあった仲良い関係になれるわけがないのだから、血がつながっているだけで一緒に暮らせたり、仲よくやれるということはない。だから距離をおいてつき合うために自立することは本当に大事だと思った。」（府中24歳女性）

「最近、母のことでがっかりしていることがある。以前ならば、それぐらい自分で決めていただろう事も私にわざわざ電話で聞いていたりす

ることだ。昔のように自分で決めて欲しいと思うが、それだけ年をとったんだなとも感じる。自分も年をとったら同じ道をたどるのかと思うと少しぞっとする。」(府中29歳女性)

「就職前は一人暮らしであったために両親には口うるさく言われることはなく、自由度(精神的なもの)が高かったように思える。しかしながら現在では、両親と同居しているため口うるさく言われることでストレスを感じている。勤務先である銀行でのストレス発散の場所は、どうしても実家ではなく行きつけのバーとなっている。」(松本24歳男性)

府中の24歳の女性の記述には、「脱する」という表現が見られる。子の自立を困難にしている一つの要因は、子をペットのようにかわいがる親の愛であるということもできる。感謝は表明しつつ、親とは多少距離をとりたいと思う子の意識が端的に表れている。別居し就職して、いわゆる一般的規範としての自立の要件を満たしていても、親からの自立は問題となっている。

「親と距離をおいてつきあうこと」、これが、20代にとって親子関係を良好に保つために重要なこととされている。お互いを大人として認識し、それに見合った距離をとれるかどうか、親子関係を良好に転じさせるきっかけとなっている。

#### 4) 自由・感謝・信頼

20代の親子関係評価には、離家と必ずしも結びつかないが、繰り返し出てくるキーワードがある。それは、「自由」にさせてくれている親に「感謝」するという表現、そして「尊重」ないし「信頼」しあっているという表現である。

「親と向き合って話すことは大切なことだと思う。私の親は私のことを尊重してくれる。今後もお互い支え合って理解し合っていきたい。別に親離れてないとか子離れてないとかそういうこととは別で、この先もずっと大切にしていきたいと思っている」(松本21歳女性)

「親は私に対して干渉しないので、自由にさせてもらっている。」(松本21歳女性)

ら、卒業したり就職したりしても殆ど今までと何も変わっていかないと  
思う。自由といっても親が私に関心がないというわけではない。親には  
とても感謝している。」(松本21歳男性)

「両親は基本的に放任主義ですが、私も私の姉妹たちも両親を尊敬し  
ていて大切に思っているし、両親も子どもを信頼してくれているので、  
変わらず、ずっと良い関係にあります。」(松本22歳女性)

「進学の時などは、全て自分の好きなようにして良いと言っていた。  
自由放任主義らしいです。私がまだ学生のため、経済的に頼りっぱなし  
で、それでも文句ひとつ言わず、私の好きなようにさせてくれる両親に  
感謝しています。」(松本22歳女性)

「うちは良い関係が保てていると思っている。親が自分のことを信頼  
してくれているから自分もそれなりに良識のある行動をとっている。何  
でも自由にさせてくれる親に感謝」(府中22歳男性)

彼ら／彼女らにとって「自由」とは獲得するものではなく、与えられるも  
のである。親から離れて、始めて得られるといった「古典的な」自由観とは  
異なっている。親の庇護のもとでの「自由」に「感謝」し、それを許してく  
れる親を「尊敬」している。ここでは親子間に起こりうる緊張は、「自由(放  
任)」によって回避されている。別居して自活してこそ「自立」であるとい  
う価値観をいったん留保して彼らを見るならば、そういった親子関係を維持  
できることが、ポスト青年期の「大人」同士の親子関係の「良好さ」の特徴  
であるとも言える。子どもからみれば、従って「自立」とは子である自身の  
「自立」というよりはむしろ「親子の自立」であり、問題となるのは、親子  
間の自立の困難さ、距離の取り方の困難さである。以下の3人の若者は、  
自身の自立(親離れ)よりも親の「子離れ」を取り上げている。

「同居はしていますが、わりとお互い不干渉な生活を送っています。  
多分、親がそれぞれ自分の生活をもっているため(仕事をしているため)  
子離れできているのだと思います。」(府中23歳女性)

「28歳にもなり、いい加減独立しようと思っているが、現在の生活レ

ベルを落としたくなく、今も同居を続けている。が、この年になると、親に心配もかけたくなく、干渉されたくもないし、会話が序々に減っている（距離が開く）ような気がする。親にとって子はいつまでも子どもなんでしょう。結局は自分勝手なだけなんでしょうけど。」（府中28歳男性）

「親とはあまり真剣な話をしたことがない。大学卒業後、実家に戻り、就職するか一人暮らしをしながら働くか迷ったが、親のことを考えるとやはり実家に戻った方が良さだろうと思ひ、帰った。私としては妥協しなくてはならなかった……という気持ちがある。学生の頃は親元を離れ、自由な生活ができたけれど、社会人になってからは親のことを気にしつつ生活しているような状況で少し不満が残る。子どもはいつまでも親と一緒にはいられない。大切にしたいけど自分の人生に悔いが残るのも好まない。今は実家にいるのは私だけなので、私にべったり。」（松本24歳女性）

次の記述も、親から「距離をおくこと」を望んでいる。

「友人知人の様子からすれば、比較的親子関係は良好だと思うが、最近自分が社会人になったこともあり、少し距離をおいて自立したいと思うこともある。同居していることが、当たり前だとは思いたくない。離れることはとても淋しいけれど、自分の成長には不可欠だと、このごろ強く思う。離れていても通じ合えらると思いたい。働き始めて兄弟3人養って大学まで出す大変さを感じたことで、とても感謝している。」（府中24歳女性）

20代の自由回答から、「良好な」親子関係を可能にしている要件の一つは、彼らなりの「自立」意識と親とのほどよい「距離」であるという特徴が浮かび上がってきた。「距離」の取り方によって親子関係は良好になったり息苦しくなったりしている。ここに現れる若者の意識を、ある規範的立場から「甘い」と批判することは簡単だが、その立ち位置からでは、これらの若者

の葛藤を理解することはできない。就職や離家をもってしても親からの心理的自立が困難な若者の葛藤は客観的な指標からは捉えがたく、曖昧でなかなか出口の見えないものである。

では、対して親世代にあたる50代は、子との関係や支援をどのように記述しているだろうか。

#### 4. 50代からみた親子関係

50代は、20代よりも、よりいっそう親子関係を「良好である」と答える比率が高く、同居満足度も高い。別居したいができないという答えは少数派である。Williamsonによれば、青年期の子を持つ親にとっての危機は、子どもが情緒的に親から離れていってしまうことであった。JonesとWallaceが指摘した、理想は自立すべきであるが、子どもは親元においておきたいという親の葛藤は本調査にも見られる。離れてしまうのが淋しいというストレートな記述もあるが、早く独立してほしいという記述もある。それに加えて子どもを手元に置いておく理由としてあげられているのは、子どもの現在や将来のために、同居した方が経済的に有利であるという点である。

##### 1) 理想は「自立すべき」

50代が同居に満足しているからといって、ただ情緒的満足のためだけに子どもを手元においておきたいというわけではない。「自立すべき」だが、現状（同居）も居心地がよいという両義的な意識が、下の記述には顕著に見て取れる。また現在の若者がおかれている社会状況は、子どもを手元においておきたい親に格好の理由を提供しているともいえる。親が望む子の「自立」は‘よりよい形’での自立であり、それが達成されないならば親元にいた方がよいという意識である。「親の責任」という意識も、子どもをひきとめておく理由となっている。その意味で先述した府中の28歳男性の「親にとって子はいつまでも子どもなんでしょう」という指摘は正鵠を得ている。

「20歳を過ぎたらできるだけ独立して欲しいと願っていますが、なかなか現実には無理なようです。私の頃は既に親の金銭面まで面倒をみて

いたのに……と思うと今の状態は子どもにとって恵まれすぎているようです。反面、お互いに助け合い、意見を交換し合い、生活していくのは確かに心地良いものでもあります。」(府中56歳女性)

「上の子の方が、就職したときは、なんか家を出たいっていうようなことを言ってたんで、その子のほうが私は正直言って、なんか心配が先にたっちゃって、そんなんじゃやっていけないよとか、ここの方が便利よとか、なんとなく私のほうが引きとめてたと思うんですけども。」(府中59歳女性)

## 2) 時期的な限定：同居は「結婚まで」という区切り

子どもを手元においておきたいという気持ちが強い50代であるが、いつまでも同居し続けることを望んでいるわけではない。一つの区切りは子の結婚である。しかし、この場合も結婚したら出て行ってほしいといった強い言い方ではなく、あえていうならば、結婚したらという程度の緩やかなものである。

「それは所帯もつようになつたらそうでしょうね。」(府中54歳男性)

「結婚するまではいるものだと思っていましたね」(府中59歳女性)

「いたい、って言うならいても構わないですよ。……中略……まあ、結婚していないんだったら、いいんじゃないですかね。ええ。」(松本54歳男性)

「今のところ親子の関係は良いのではないかと考えています。結婚を機に独立してくれればと私は考えています。」(松本54歳女性)

## 3) 子からの家計への繰り入れ

10年前の調査でも話題になったが、子どもが収入の一部を親に渡しても使わずに子どもの将来のために貯金しておく親の姿は、現在も見ることができる。

「月々3万円っていうのはあの子名義で貯金をしてあげようと思っ  
て、それで結婚資金の一部にでもと思って、一生懸命一ヶ月働いてね、



それで私の好きなものを買ってって、そりゃ有難うって言ったけど…  
…」(府中50代女性)

「最初は就職したらうちを出て行くとか強気なことを言っていたんですよ。……中略……適当な場所なくて、やっぱり将来のことを考えてお金をためなくちゃいけないし、やっぱり親元において働くって言うのが一番金が残るんですよ。」(府中54歳男性)

「現在長女(27歳)長男(25歳)とは同居し、身の回りの事はほとんど私がしていますが、日々の食費は入れてもらい、時間の許す限り食事を手伝ってもらっています。今のところ親子の関係は良いのではないかと考えています。結婚を機に独立してくれればと私は考えています。日々の食費はすべて貯金し、その時に半分(プレゼント?)渡して、残りは私が老後のために使いたいと思っているのですが!」(松本54歳女性)

ここには、ひたすら子の将来を思う親の姿が全面に打ち出されている。この段階での支援は、もっぱら親から子へなされており、親はそのことについて「親として当然」という責任意識をもっている。子は、それを「感謝」しつつ享受している。親は特に見返りを期待している訳ではなく、子からの家計への繰り入れも子どものために貯金している。むしろ良好な子どもとの関係や、子どもからの「感謝」や「信頼」は、実際に渡されるお金の額よりも大きな意味を持っているのではないか。親にある程度の経済力があればという限定つきながら、子どもが家計にお金を入れるという行為や「気持ち」が、親の支援を支えているとも言える。

友達親子、仲良し親子と言われ良好さが目立つこの世代の親子関係であるが、この意味では関係は対等ではない。子は依然親の掌の上にいる。しかしそういった上下関係を、情緒関係や適度な「距離」、コミュニケーションによって顕在化させないような親子関係を取り結んでいることが一つの特徴である<sup>(4)</sup>。この調査から確認することはできないが、Heathらの研究では、個室を確保できるかどうかといったプライバシーの問題も、親との同居を考察する上では重要な要素とされている。プライバシーと自由が確保されている

ならば、これは子どもにとっても悪い選択ではない<sup>(5)</sup>。

#### 4) 将来展望

子の自立については支援を惜しまない50代であるが、自身の老後についてはできるだけ子どもに頼りたくないと思っている。図3は、20代に親の老後、扶養（経済的に面倒をみる）予定、介護する予定があるかどうかを尋ねた回答と50代に子どもに扶養や介護を期待するかどうかを尋ねた回答を一つにまとめたものである。

一目して、親世代にあたる50代の期待率の低さがわかる<sup>(6)</sup>。50代にとって自身の老後はまだ少し先の問題ではあるが、自身の親の介護や看取りは経験している。20代の場合は、理想が強く反映されているといえるが、50代には、子に面倒をかけたたくないという理想と現実をふまえた不安も記されている。

「親も子も精神的、経済的に自立していることが望ましい。特に親は子に頼るべきではない。しかし、可能ならば2～3時間以内の所に住み、月一回ぐらい行き来があり、必要に応じて助け合えると良い。同居はしたくない。親と子どもでは生活のリズムが異なり、互いにその暮ら

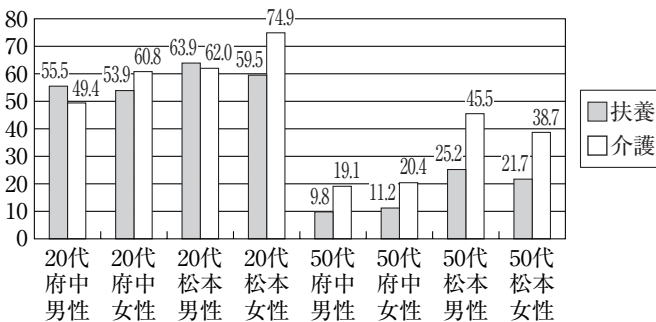


図3 20代の扶養・介護予定と50代の期待

20代は、扶養（経済的に面倒をみる）予定、介護予定の%

50代は、調査対象子への扶養（経済的にみてること）期待と他の子への扶養期待の合計%、介護も同様に、対象子あるいは他の子への介護期待の%

し方を尊重したい。」(府中56歳女性)

「男の子ども3人それぞれ私(母親)のことを(老後)心配してくれているようです。現在はまだ元気で働いているので子どもたちには頼りたくないと思っていますが、先のこと(老後)はあまり考えていません。直接、子どもたちと話し合っています。それぞれ自分たちのこと、家庭を大事にして欲しいと思います。現在の暮らしは楽ではありませんが、子どもたちが元気で頑張ってくれているので幸せです。」(府中57歳女性)

「これから先老後のことを考えると不安はあるけれど一応長男夫婦がみてくれると言ってくれているのでその言葉を信じています。が自分たちでやれるだけのことはやっ**てなるべく迷惑をかけないように**と思っています。」(松本57歳女性)

「私自身1人息子をもっていますが、どんな時でも子は子、親は親として思うところがあると思いますので、一人息子にはできるだけ**精神的負担、経済的負担はかけまいと心がけて**おります。老父母の介護をして、寂しいのはみんな同じと思いました。**子どものために親が犠牲になっても、子どもを犠牲にしてはいけ**ない****と心がけようと思っています。」(府中52歳女性)

将来展望については、親も子と同居ではなく近くで助け合える関係を望んでいる。子どもが20代の現在、子の側の自立欲求に対して子どもを側においておきたい親の意向が強く見いだされたが、長期的家族戦略としては、両者の希望は近いところにある。袖川らが指摘した(袖川他、2005)「平成拡大大家族」のように、結婚後もできれば近くに住んで行き来のある「対等な」関係が望まれている。

## 5. 結 語

20代、50代の自由回答欄の分析から見てきた「良好さ」と「自立」の関係性をまとめる。20代にとっては、親と一定の距離を保てるならば、何ら

かの「自立」意識を抱きつつ、親と良好な関係を築くことは可能であった。子どもには、離家や就職（経済的自立）によって可能になる‘わかりやすい’自立意識と、親との「距離」によって可能になる‘見えにくい’自立意識が見いだされた。前者が親元を離れてこそ自立であるという、社会一般に緩やかにではあるが存在する「自立」像に依拠した自立意識であるのに対し、後者は外からは見えにくく、また親との関係性によって揺らいだり葛藤したりする不確実なものである。

親の側の支援は、親本人にとってみれば子のよりよい自立や将来を願い、それをも親の責任と思うが故であるが、皮肉なことに、それは時に子の重荷になり、親からの自立を阻むものになる。この問題を回避して良好な関係を維持するには、居心地のよい「距離」や「自由」を保てること、そういったコミュニケーションをとれることが必要である。

他方、親の側にも、子は自立すべきという意識とそのことを寂しいと思う感情が両義的に存在した。しかし、親が思う‘よりよい’形での自立や確実な将来像の実現は、今日の社会状況では困難である。そのことが、離家を即すよりも、親元に引き留める方に強く作用して、子の支援を惜しまない親の姿が強く見いだされることとなったといえる。

自身の「自立」と親との親密さに葛藤をかかえる若者の問題は、社会的、経済的問題とはまた別の意味で深いものである。若者にとって不利な就職状況は、より子どもを親元にひきとめておく‘口実’にもなっている。その意味では、現在の若者を取り巻く社会状況と親の子を思う愛情は共犯関係にあり、親から「自立」したいと思ったとしてもその出口を見つけることは容易ではない。

本稿では、自由回答記述とインタビュー記録から、自立意識と親子関係意識の関係を探った。本論の随所でふれたように、このテーマは、アンケート調査の変数とも絡めて分析することが可能であり、ジェンダーや階層性、地域差などをふまえて論点をさらに展開することが必要である。この点については今後の課題としたい。

## 注

- (1) 本調査は、平成13年度から16年度にかけて文部科学省科学研究費補助金の交付を受けた（研究代表者岩上真珠、研究課題名「少子・高齢化社会における成人親子のライフコース的研究—20代—50代調査；1991—2001年—）。データの使用をお認めいただいたポスト青年期研究会の代表である、聖心女子大学岩上真珠先生、放送大学の宮本みち子先生、そして研究会のメンバー全員にこの場を借りてお礼を申し上げます。
- (2) 20代の自由回答と50代へのヒアリング調査は岩上編（2005）に、50代の自由回答結果は、ポスト青年期研究会編（2004）に記載されている。また、1992年、1993年にも同様の主旨のアンケート調査を実施している。10年前の調査については、家計経済研究所編（1994）、宮本・岩上・山田（1997）にまとめられている。今回（2001年～2003年）の調査報告は、ポスト青年期研究会編で世代別・地域別の報告書の他、科学研究費の報告書にまとめられている（ポスト青年期研究会 2003a, 2003b, 2004）（岩上編 2005）。アンケート調査は住民基本台帳からの層化二段階抽出法、調査方法は、20代が留め置き自記法、50代が郵送法である。有効票と回収率は、それぞれ府中20代が620票、41.3%、松本20代が400票、44.4%、府中50代が585票、39.0%、松本50代が665票、44.3%であった。50代のインタビュー調査は、2003年度の郵送調査回収票から、住所と回答者名が記載してあった対象に対して、調査協力の意思をはがきで尋ね、返事があったものについて研究会の若手メンバーが実施した。
- (3) 親子の親密さについては、ギデンズの親密性概念への批判という形で、そもそも親子という非対称な関係にあって純粋な関係性を維持することが困難であるという指摘もある（Jamieson 1998, 1999）。
- (4) 乾らは、このような親子間のコミュニケーションを「感情資本」という概念を用いて説明を試みている（乾編 2006）。
- (5) 子世代は、親と適切な距離をとることで親子関係が良好になったと感じているが、実際親と同居している20代でも、帰宅時間や夕食をともにする頻度を見ると、日常的なコミュニケーションは必ずしも密ではないと推測される。ただし、これには地域差やジェンダー差があって、例えば松本の20代女性は帰宅時間も早く、親と共にする夕食の頻度も高いが、親との関係の良好さも高い比率である。この点については別稿で論じたいと考えている。

- (6) ここにはジェンダー差がある。20代女性に介護予定率が高く、50代の介護期待も娘への期待の方が高い。具体的な集計値は、岩上編（2005）に収録されている米村（2005）にある。20代女性の扶養意識については、本調査に基づいた計量的分析を中西（2007）が行っている。

## 参考文献

- Anderson, M., 1981, *Approaches to the History of the Western Family, 1500–1914*, Cambridge Univ. Press = 北本正章訳 2000『家族の構造・機能・感情—家族史研究の新展開』海鳴社
- Chapman, T. and J. Hockey, 1999, *Ideal Homes? Social change and domestic life*, Routledge.
- Coleman, John and L.B. Hendry, 1999, *The Nature of Adolescence (3<sup>rd</sup> edition)*, Routledge = 白井利明他訳 2003『青年期の本質』ミネルヴァ書房
- Giddens, Anthony, 1992, *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism in Modern Societies*, Polity. = 松尾精文・松川昭子訳 1995『親密性の変容』而立書房
- Heath, S. and Elizabeth Cleaver, 2003, *Young, Free and Single?: Twenty-something and Household*. Palgrave Macmillan.
- 乾 彰夫編 2006『18歳の今を生きぬく 高校1年目の選択』青木書店
- 岩上真珠編 2005『少子・高齢化社会における成人親子関係のライフコース的研究』（科学研究費報告書）
- Jamieson, Lynn, 1998, *Intimacy: Personal Relationship in Modern Societies*, Polity.
- 1999, 'Intimacy Transformed? A Critical Look at the 'Pure Relationship'', in *Sociology*, 33 (3): 477–494.
- 家計経済研究所編 1994『「脱青年期」の出現と親子関係—経済・行動・情緒・規範のゆくえ』家計経済研究所
- 春日キスヨ 1997『介護とジェンダー』家族社
- 2001『介護問題の社会学』岩波書店
- 春日井典子 2004『介護ライフスタイルの社会学』世界思想社
- Kenyon, Liz, 1999, 'A home from home: Students' transitional experience of home', in T. Chapman and J. Hockey (eds.) *Ideal Homes? Social*

*Change and Domestic Life*. Routledge.

- 内閣府編 2002『平成13年度版 国民生活白書』(株ぎょうせい)
- 内閣府ホームページwww5.can.go.jp/seikatsu/senkoudo/senkoudo.html
- 中川 敦 2006「実のむすめによる「遠距離介護」経験ときょうだい関係」『家族研究年報』31：42-55
- 中西泰子 2003「母—娘関係と『母親業の再生産』」『家族研究年報』28：27-37
- 2007「若者の老親扶養志向にみるジェンダー：「娘」の意識に注目して」『家族社会学研究』19-2：46-57
- 宮本みち子 2004『ポスト青年期と親子戦略』勁草書房
- 宮本みち子・岩上真珠・山田昌弘 1997『未婚化社会の親子関係—お金と愛情にみる家族のゆくえ』有斐閣
- Mizen, Phil 2004, *The changing state of youth*, Palgrave.
- Morley, David, 2000, *Home Territories. Media, Mobility and Identity.*, Routledge.
- ポスト青年期研究会 2003a『20代未婚者の仕事・結婚・親子関係「成人期への移行」に関する調査研究 Part I 2001年未婚20代府中調査報告書』ポスト青年期研究会
- 2003b『20代未婚者の仕事・結婚・親子関係「成人期への移行」に関する調査研究 Part II 2002年未婚20代松本調査報告書』ポスト青年期研究会
- 2004『親からみた20代未婚者の仕事・結婚・親子関係「成人期への移行」に関する調査研究 Part III 2003年府中・松本50代調査報告書』ポスト青年期研究会
- 坂本佳鶴恵 1990a「長男扶養に関わる2つの規範」『社会老年学』32：74-82
- 1990b「扶養規範の構造分析」『家族社会学研究』No.2：57-69
- 白波瀬佐和子 2005『少子高齢社会のみえない格差』東京大学出版会
- 袖川芳之・花島ゆかり・森住昌弘 2005『平成拡大家族 団塊と団塊ジュニアの家族学』電通
- Solomon, Yvette, Jo Warin, Charlie Lewis and Wendy Langford, 2002, 'Intimate Talk Between Parents and Their Teenage Children: Democratic Openness or Covert Control?', in *Sociology*, 36 (4): 965-983.
- 渡辺秀樹他編 2004『現代家族の構造と変容』東京大学出版会

Williamson, D.S., 1991, *The Intimacy Paradox: Personal Authority in the Family System*. Guilford Press.

山田昌弘 1999 『パラサイト・シングル時代』 ちくま書房

米村千代 2005 「第13章 扶養・介護」「第14章 家族意識・規範」、岩上真珠編『少子・高齢化社会における成人親子関係のライフコース的研究』（科学研究費報告書）169-189.